

## 研究結果報告書

### 近代日本知識人の翻訳思想と新概念の成立

所属：厦門大学 外文学院 日本語学部

役職：助教授

氏名：王 暁雨

本研究は文化交渉研究の立場から、明治維新前後、知識人が西洋文化をめぐる展開した翻訳活動に着目した。その代表的な翻訳者として、福沢諭吉と中村正直を選んだ。この二人は明治期の重要な思想家として、先行研究の多くは「近代化」という先験的な枠組みから、日本社会における「近代的」な体験を福沢と中村の思想境地と結びつけたものが殆どであり、「翻訳」を主体とした研究はまだ検討する余地が残っていると感じられる。したがって、本研究はこの二人の翻訳に焦点を当て、翻訳における従来の言語学的見解を意識しつつ、「思想としての翻訳」という立場から読み直してみた。

研究計画書の書いたとおり、2017年8月東京に行き、国立国会図書館と慶応大学で資料調査を行った。また、2018年2月、日文研に行って本研究に係る資料を収集した。資料調査の成果に基づき、幕末から明治初期にかけてその翻訳時代を背景として、二人の翻訳作品や「翻訳」に関する論述等を中心として、西洋文化を受け入れる趣旨を探求してみた。また、訳語をめぐる模索や反省を通じ、西洋文化への受容態度や文化選択の姿勢を具体的に考察した。したがって、福沢は西洋文化を異質なものとして取り扱ったことに対して、中村は儒学の思想理念によって西洋思想を受け入れようと努めたということが見えるようになった一方、福沢も中村も翻訳活動が啓蒙活動に従うことも注目すべきだと思う。福沢と中村の翻訳を言及した時、漢文訳と俗文訳の優劣を論じるのが多い。しかし、漢文訳、俗文訳の論争は、表面的には文字を翻訳する「技術」が取り上げられているように見えるが、実は他文化に対する理解と自文化に対する期待が同時に含まれている。福沢と中村の翻訳はただその時代の一角でしかないが、それをめぐる諸問題から近代化に対する日本の学者の姿勢や葛藤が伺えると思う。

19世紀半ば、文化の輸入につれ、西洋から近代に関係するたくさんの概念が翻訳され、新たな言説体系を構築した。翻訳は言語間の転換だけではなく、価値体系、思考様式、文明観念に対する能動的な選択結果が表せると考えている。近代的言説体系の構築に大きな影響を及ぼした知識人は伝統的バイアスに対抗しながら、翻訳活動を始め、「西洋の近代」を「日本の近代」に書き換えることに努めた。今度の研究は福沢諭吉と中村正直における「西洋の近代」への書き換えを解明してみたが、今後も他の知識人の翻訳活動を研究し続け、翻訳活動を土台にした近代言説の成立を把握しようと思う。

## 研究成果の公表について

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

「翻訳と啓蒙の二重奏——福沢諭吉の翻訳観を中心に」、王晓雨、第一回「日本学研究」院生フォーラム（主旨講演）、2017年4月22日、浙江工商大学。

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

「時代の翻訳者——福沢諭吉と中村敬宇」、『厦門大学学报』、査読中。  
「梁啓超と福沢諭吉における翻訳思想の比較的研究」、『中国翻訳』、投稿中。

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）

『近代中日核心概念的翻译与知识分子』、王晓雨、福建教育出版社、2018年出版する予定。